

福島県 中学校長会 広報

・会長「就任のあいさつ」……………	1
・平成31年度(令和元年度) 第69回福島県中学校長会総会……………	2
・組織及び役員一覧……………	2
・学校教育の今日的課題「学校経営を考える」…	3
・令和元年度中学校長会の活動と運営…	4～5
・令和元年度第70回全日本中学校長会総会報告…	6
・支会情報と特色ある経営 (伊達・郡山・東西しらかわ・北会津)…	7～10
・新会員紹介 新入会員の声……………	11
・随想「瞬間」を捉える……………	12



就任のあいさつ

福島県中学校長会長 佐藤 晃
(福島市立福島第四中学校)

今年度、福島県中学校長会会長を拝命いたしました。もとより微力ではございますが、ご支援とご協力をいただきながら、会長職を務めさせていただきたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願い申し上げます。

はじめに、伊藤隆幸前会長様をはじめ本年3月末をもってご勇退されました校長先生方のご功績に敬意を表しますとともに、長年にわたるご指導に対しまして、心より感謝を申し上げます。特に昨年度は、本会の創立70年記念式典及び第46回研究協議会県中県南大会の開催、並びに東北地区中学校長会研究協議会山形大会、全日本中学校長会研究協議会鳥取(米子)大会への参加等にご協力いただきました。また、各専門部会等の活動を各支会の中心となって積極的に推進いただき、多くの成果を得ることができました。今後とも大所高所よりご指導とご助言を賜りますようよろしくお願い申し上げます。

さて、急速な社会の変化とともに、矢継ぎ早に教育改革が進行する中、新学習指導要領の円滑な実施や、いじめ、不登校、虐待、SNSに係る問題等への対応、学校における働き方改革の推進など学校が抱える課題は山積しています。

一方、本県においては、東日本大震災及び原子力発電所事故から8年が経過し、昨年春には新たに5町村を加え、合わせて10市町村において、小中学校が地元での再開を果たしました。しかし、未だ故郷を離れ福島県内外に避難している18歳以下の子どもの数は、平成30年4月1日現在で、1万7千人を超えています。さらに、再開後も続く児童生徒数の小規模環境や廃炉作業の危険など多くの課題が残されています。

このような中、本会の運営に当たっては、様々な状況下にある各学校の実態を踏まえ、「教育活動の正常化と当面する諸課題の解決」という基本方針の基、次の4つの観点を重視しながら、各専門部会を中心に年間の活動計画に従って事業を展開してまいります。

- 1 校長会は、校長自らの見識・資質等を高める研修の場であることを踏まえ、その成果等の効果的な活用(教育行政への提言等)を推進します。
- 2 「全日中教育ビジョン」を踏まえ、学校からの教育改革に努めます。
- 3 教職員としての誇りと使命感をもち、不祥事の絶無に努めます。
- 4 教育諸条件の整備・充実と教職員の処遇改善に努めます。

今後とも、私たち校長は「学校は復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことを肝に銘じ、福島復興・創生に寄与すること、さらには、学校経営の最高責任者としてのリーダーシップを発揮し、教育課程の効果的な運用と教育環境の整備を図りながら、子どもたちに求められる資質・能力を身に付けさせることが肝要であります。

「校長会はひとつ」を合言葉に、各支会との連携を密にし、会員の総力を結集するとともに、県及び各市町村教育委員会、並びに関係機関等のご指導とご支援を賜りながら、本会の組織的で継続的な活動を通して、諸課題の解決に全力で取り組む考えであります。

終わりに、子どもたちが郷土への誇りと自信、将来への夢と希望をもち、福島復興・創生を担う人材として成長するために「生き抜く力」と、「よりよい社会を形成する力」を育めるよう会員の皆様のご理解とご協力を重ねてお願い申し上げます。就任のあいさつといたします。

平成31年度(令和元年度) 第69回福島県中学校長会総会

平成31年度(令和元年度)、第69回福島県中学校長会総会は、4月17日(水)福島県教育会館において開催されました。

総会では、堀田隆福島県中学校長会会長代行のあいさつの後議事に入り、平成30年度会務・事業の承認及び決算報告が上程通り承認されました。続く平成31年度(令和元年度)の役員選出では、会長、副会長、監事の8名が満場一致で決定され、佐藤晃氏(福島市立福島第四中学校)が新会長に選任されました。

新役員を代表して、新会長から就任のあいさつがありました。職責の重さを自覚した強い決意とともに、福島県中学校長会はひとつ、「会員208名は、チームの一員であり、かけがえのない仲間です。」という思いを述べられました。さらに、新会長より、事務局長、各専門部会長、庶務、会計の委嘱が行われ、新体制がスタートしました。

その後、平成31年度(令和元年度)の事業計画及び予算案が審議され原案どおり承認されました。総会の最後には、福島県中学校長会事務局として校長会の企画・運営にご尽力いただいた小柴治紀事務長がご勇退されるに当たり、佐藤晃会長から、感謝の言葉と花束が贈呈されました。

総会後の小・中合同開会式では、小・中学校を代表して佐藤晃中学校長会長があいさつし、続いて来賓を代表して、福島県教育委員会教育長鈴木淳一様、福島県市町村教育委員会連絡協議会会長佐藤玲子様、元県中学校長会長神田紀様よりご祝辞をいただきました。最後に、前県小学校長会長古関明善様が退会役員を代表してあいさつをされ、式を閉じました。



組織及び役員一覧

※ 理事が2名いる支会(福島・郡山・いわき)の会長:◎印
※ 常任理事:○印

役職名	氏名	勤務校	
会長	佐藤 晃	福島 四	
副会長	行財政	佐原 聡	二本松 一
	研究	歌川 哲由	若松 三
	進路指導	早川 良一	檜 葉
	生徒指導	堀田 隆	郡山 一
監事		星 克一	郡山 四
		我妻 雄比古	田 島
		箭内 仁史	向 陽
理	福 島	◎○管原 克章	福 島 三
	福 島	佐藤 晃	福 島 四
	伊 達	大木 修	釀 芳
	安 達	佐原 聡	二本松 一
	郡 山	◎堀田 隆	郡山 一
	郡 山	内田 恒一	郡山 三
	岩 瀬	長場 壮夫	須賀川 一
	石 川	塩田 正信	石 川
	田 村	佐藤 和典	三 春
	東西しらかわ	○鈴木 健生	矢 吹
	北 会 津	歌川 哲由	若松 三
	耶 麻	○田代 新一	喜多方 二
	両 沼	高橋 弘悦	会津柳津学園
	南 会 津	我妻 雄比古	田 島
相 馬	箭内 仁史	向 陽	
双 葉	早川 良一	檜 葉	
い わ き	◎○西内 英理	平 一	
い わ き	橋谷田 聡	小名浜 一	

【事務局】

事務局	事務局長	佐藤 浩哉	福 島 一
	行財政部会長	大越 一也	野 田
	研究部会長	加藤 芳宏	松 陵
	進路指導部会長	石川 幸男	渡 利
	生徒指導部会長	渡辺 康弘	清 水
	広報部会長	古川 豊	蓬 菜
	庶 務	目黒 満	飯 野
	会 計	佐藤 信行	立子 山

学校教育の今日的課題



—学校経営を考える—

福島県中学校長会副会長 早川 良一
(檜葉町立檜葉中学校)**1 はじめに**

会員の皆様には、双葉支会をはじめ震災及び原子力発電所事故の被害を受けた多くの学校への継続的なご支援を賜り、衷心より感謝申し上げます。双葉支会は、今年度県立ふたば未来学園中学校をお迎えするも、8年にも及ぶ避難から浪江町立浪江中学校、浪江東中学校、津島中学校の3校が休校、未だ双葉町はいわき市、大熊町は会津若松市、浪江町の小学校の一部は二本松市、富岡町の一部は三春町に移転したまま仮設校舎や借用施設で教育活動を行っています。しかし、10名の校長が相互に情報共有・連携を図り、教育の復興・推進を目指して活動しています。

2 課題と向き合う中で

さて、グローバル化や情報化、少子高齢化など社会の急激な変化の中で、中学校教育が抱える課題は、学力の向上はもとより、生徒指導の充実、安全・安心な学習環境の確立、多忙化解消・働き方改革等々、数え上げることができないほど山積しています。向学心や規範意識の育成といった生涯にわたる課題にもしっかり対応するために、各中学校で家庭や地域社会との連携を強化し、心身ともに健やかな中学生を育成することが求められています。

改めて、校長としての学校経営について考えてみたとき、学校は地域の中で地域とともに歩むものであると強く実感します。ひとたび学校としての地域からの信頼を失えば、教育活動は成り立たなくなります。地域から教育活動への理解と支援を得るためにも、生徒・教職員の取組を常に発信することが大切だと考えています。

3 認め合い、高め合う集団づくり

学校生活に意欲的に取り組ませるためには、生徒同士の好ましい人間関係を築かせることが大切だと考えます。中学校生活での数々の挑戦や豊富

な経験は生涯にわたる財産となります。生き生きとした学校生活を送るなかで、「互いを認め合い、信頼し合い、高め合う」基盤が作られれば、教育効果を最大限に引き出すことができると考えます。さらに、いじめや問題行動が減少し、学力の向上にも結びつくものと思います。一方、教職員も同様であり、「コミュニケーションがとりやすく、認め合い、高め合う」組織づくりが、数々の教育課題に前向きに取り組む教職員集団をつくることにも結びつくものと考えます。

これまでの経験として、教職員は同僚や生徒に育てられ成長してきました。校長は育てられやすい環境を整えることが責務の一つであると考えます。そのためには、教職員の個性と組織を生かし、機会を与え、成果を認め、自信をもたせることが、教職員にも必要だと考えます。

4 地域人材の活用

双葉郡の小・中学校では、「震災で子どもたちが得た経験を、生きる力に」との思いを込め、総合的な学習の時間を活用して「放射線教育」と「ふるさと創造学」を推進してきました。さらに、3年前に檜葉町に戻って学校を再開した本校は、町役場や町商工会、地域企業等のご支援のもと「キャリア教育・起業家教育」を実施しています。「地域を知り、地域素材を活用した商品を開発し、元気とともに全国に発信する」という探究的な学習活動を行っています。ここでも、教職員は同じ課題と向き合い、地域人材との連携を積極的に図り、生徒の学びを支援していく組織的な取組を展開しなければなりません。校長として、目指す方向を示し、進捗状況を確認し、成果と課題を教職員が共有できるようにすることが大切だと考えます。

今後も学校・地域が連携・協働し、地域の未来を担う生徒の育成を目指して一層の努力を続けていきたいと考えています。

令和元年度

「県中学校長会の活動と運営」

事務局長 佐藤 浩哉

元号が令和となり、新たな時代の幕開けとなりました。中学校では、考え議論する「特別の教科道徳」の授業が始まり、新学習指導要領への移行期も 2 年目となり、「社会に開かれた教育課程」及び「主体的・対話的で深い学び」の実現、「カリキュラム・マネジメント」の確立が求められ、また、安全・安心への今まで以上の関心の高まりとともに、高度情報化や国際化に伴うライフスタイルや価値観の多様化など社会全体が急激に大きな変化を呈しています。

本県の教育を取り巻く環境を考えると、とりわけ、人口減少、少子高齢化による児童生徒数の減少、それらに伴う学校統廃合が進められていることや、東日本大震災及び原子力発電所事故による甚大な被害が生じ、震災後 8 年 4 ヶ月を経過した今でも、特に浜通り地方を中心として大きな影響を受けている現状です。休校となっている中学校が 3 校、いまだに仮校舎等で授業を実施している中学校が 6 校あり、県内外に避難している生徒も多数います。

このような中、生徒の未来のためにも「全日中教育ビジョン 学校からの教育改革」(平成 28 年度改訂版)の理念と 10 の提言を受け、会員の英知を結集して本県中学校教育の更なる充実・発展を目指し、活動を推進しなければなりません。

私たち福島県の中学校長は全員、これらのことを的確に踏まえながら、「学校は、復興のシンボルであり、復興の活力源である」ことを肝に銘じ、福島県の未来の担い手である生徒に人間尊重の精神を基盤としながら、困難に直面してもたくましく臨機応変に行動できる「社会を生き抜く力」と「よりよい社会を創り出す力」を育む教育を推進して、

県民の信頼と期待に応えるため、学校経営の充実に努めなければなりません。さらには、学校が担うべき業務の精選・明確化により「学校における働き方改革」を推進し、新しい時代に求められる学校づくりに向けてリーダーシップを発揮しなければなりません。

本年度の第 47 回福島県中学校長会研究協議会は各支会での研究協議会となりますが、新研究主題初年度であり、本県の実状を踏まえた実践研究を進め、教育課程編成・実施上の諸課題を把握し、校長としての学校経営力の向上に資するものとなることを期待しています。

さらに全日本中学校長会の研究主題「新たな時代を切り拓き、よりよい社会を創り出していく日本人を育てる中学校教育」を受け、8 つの小主題を支会ごとに分担し、実践研究の成果を研究集録としてまとめ、校長としての資質の向上と学校経営の改善にいかしていきます。

本年度も各部会での活動や各種調査等を通して本県教育の充実・振興に向けた課題をより明確にし、教育行政をはじめ各種団体、関係機関等への要望活動や様々な働きかけを行います。各調査結果から得られた根拠のあるデータによって、各種施策が、生徒と教職員にとってよりよいものになるように努めなければなりません。

このような活動の効果を上げるためにも、今後とも、本会員の連携強化を図るとともに、県小学校長会や高等学校長協会、その他関係諸団体・機関との連携に努めながら諸課題の解決を目指していきたいと考えています。

会員の皆様の深いご理解とご協力、そして積極的な取組をよろしく願います。

専門部会活動の概要

● 行財政部会 ●

県小中学校長会の活動方針を踏まえ、互いに連携を密にしながら教育行政上の課題解決のために、組織的・継続的な対策活動を推進します。東日本大震災及び福島第一原子力発電所事故から 8 年が経過しましたが、学校現場は復興へ向けて様々な課題を抱えています。その状況を把握し課題解決に向けて対応するために、行財政に関する調査において特別調査を継続して実施します。

1 活動の重点

- 多様な教育活動に対応するための教育諸条件の整備・充実
- 教職員の待遇改善と福利厚生の上
- 当面する重要課題の調査研究と課題解決

2 調査研究活動

- (1) 令和元年度「教職員人事の反省」

- (2) 調査 I : 教職員配置等に関する調査

- (3) 調査 III : 教育施策の実施状況調査

- (4) 特別調査 : 大震災・原発事故の影響に係る調査
以上の調査結果を分析し、課題を明確にして要望活動や教育懇談会、各支会の活動、学校経営に活用できる資料とします。

3 要望活動

県中学校長会の佐藤晃会長、県小学校長会長の佐々木義通会長を中心とする要望団を結成し、9 月に要望活動を行います。要望先は、福島県人事委員会、福島県議会議員各会派等を予定しています。

4 教育懇談会

福島県教育庁関係者との懇談会を 8 月 19 日(月)に予定しています。行財政に関する調査をもとに、行政への働きかけをして、県の教育行政上の説明を受け、課題解決に当たります。

(行財政部会長 大越 一也)

● 研究部会 ●

1 共通理解に基づく共同研究の推進

今年度は、新研究主題及び小主題に基づく3年継続研究のスタートの年度となります。これまでの研究成果を踏まえつつ、昨年度末に刊行しました「研究の手引き」に基づき、共通理解を図りながら8小主題についての各支会毎の共同研究を推進します。

次年度は、県研究協議会が「会津ブロック」を会場担当として開催予定となっています。各支会における2年次の研究成果を持ち寄り、8分科会においてそれぞれ発表・研究協議を予定しています。

2 研究集録の編集、刊行

前述のように、今年度は新研究主題になっての研究の初年度となりますが、年度末には、8小主題について各担当支会の1年間の研究成果をまとめた研究集録を刊行し、2年次以降の研究推進につなげていきます。

3 全日中、東北地区中と連携した研究の深化

6月27日、28日に開催される東北地区中学校長会研究協議会秋田大会において、伊達支会が「生徒指導」に関する分科会で研究の成果を発表します。

また、東北地区中学校長会研究協議会秋田大会、全日本中学校長会研究協議会群馬大会に参加し、他都道府県の研究推進にかかわる情報等を収集し、各支会へ提供します。

4 原子力発電所事故に関わり、学校教育が向き合った課題、対応等の記録の累積と発信

今年度も、研究集録の中に「ふくしまの今」～双葉支会の現状～を掲載し、記録の累積を行うとともに、本県のかかえる課題等を全会員で共有します。(研究部会長 加藤 芳宏)

- ・令和元年度末進路指導に関する調査
- ・県下一円の進路動向調査の実施と有効活用
- (2) 学級活動の時間の充実のための副読本編集
- ・「中学生活と進路(県版)」の編集と活用
- (3) 就職指導、専修学校・各種学校等の選択指導のための指導助言活動の推進
- ・就職情報の収集と関係機関との連携強化
- (進路指導部会長 石川 幸男)

● 生徒指導部会 ●

本県中学校長会として、生徒指導の充実を図るための基盤づくりを強化するとともに共通理解に立ち、自己指導能力や規範意識を高める指導に努めます。特に、東日本大震災及び原子力発電所事故に起因する生徒指導上の課題、発達障がいのある生徒への対応やインターネット利用の仕方等今日的課題に対応しながら、生徒の心の問題や安全・安心に配慮した対策を施します。

そのための組織の強化として、積極的に関係機関との連携を図ります。特に、小学校との連携を重視します。

1 自己指導能力の育成と規範意識の向上

- ・自己決定の場や自己存在感を与える教育活動の充実と共感的な人間関係の育成
- ・共通理解・実践に基づく一貫性ある学習・生活習慣づくりの推進と協働体制による指導

2 震災、原子力発電所事故等にかかわる課題・当面する諸課題の把握とその解決や未然防止

- ・不登校、いじめ、反社会的行動及び虐待の実態把握と早期解決を目指した指導体制の確立
- ・SCやSSW_r等の専門スタッフのコーディネイトを活用した「チーム学校」としての取組
- ・インターネット利用状況等の実態把握と情報モラル教育の一層の充実

3 小学校及び高等学校、家庭、地域、関係機関や関係団体との連携強化

- ・他校種への理解の深化と効果的な情報の共有
- ・生徒指導主事協議会や学警連定例会等における研修の充実

4 アンケートに基づく生徒手帳の編集、刊行

(生徒指導部会長 渡辺 康弘)

● 進路指導部会 ●

1 「生き抜く力」をはぐくむキャリア教育の視点に立った進路指導の充実

- (1) 進路指導体制の改善・充実
 - ・進路指導の活性化をめざす校内体制の改善
 - ・新学習指導要領を見据えた進路指導の充実
- (2) 適正な進路指導推進のための資料収集、整備活用の工夫
 - ・情報の収集・整理、活用と進路相談の充実
 - ・特別支援学級等における進路指導の充実を図るための資料収集と実態把握

2 高等学校入学者選抜方法の改善に向けて高等学校や関係機関との連携

- (1) 高等学校との連携
 - ・福島県高等学校長協会、福島県私立高等学校協会との話し合い活動の推進
- (2) 高等学校入学者選抜方法の改善、提言活動の推進
 - ・県立高等学校入学者選抜事務調整会議での要望、意見等の資料作成
 - ・新入学者選抜の内容と方法に関する情報提供と対応、意見集約と提言

3 適正な進路指導の充実のための諸調査と資料の提供

- (1) 進路指導に関する諸問題の把握と資料提供
 - ・平成30年度末進路指導に関する調査の分析と連携のための資料提供

● 広報部会 ●

広報部会は、広報誌「福島県中学校長会広報」を年2回発行し、ホームページの維持・管理を行い、本会及び関係団体等の活動状況や会員に役立つ新しい情報などを提供し、活用促進を呼びかけ、広報活動の充実を努めます。

1 本会及び関係団体等の活動や動向についての情報提供、広報活動の充実

- (1) 本会の組織・運営、事業内容、活動状況の報告
- (2) 各支会の活動及び、本会活動への会員の意見や感想の紹介
- (3) 関係団体等の活動概要の報告
- (4) 広報紙の発行とホームページの運営、資料の整理

2 関係機関・団体等との連携、情報提供

- (1) 関係機関からの情報把握と会員への早期周知
- (2) 諸活動の報告など

(広報部会長 古川 豊)

令和元年度 第70回全日本中学校長会総会報告

第70回全日本中学校長会総会が、5月22日・23日に東京都国立オリンピック記念青少年総合センターにて開催されました。本県からは佐藤晃会長はじめ12名が参加しました。

第1日目、総会での山本聖志会長のあいさつでは、昨年度の鳥取（米子）大会や本県を含む東日本大震災支援活動の報告がなされました。次に校長会として国への働きかけ等の諸活動について、また引続き全日中教育ビジョン「学校からの教育改革」についての取組推進の話がありました。

続いての議事では、平成30年度の会務報告・決算等について承認され、今年度の役員についての審議では第43代会長として川越豊彦氏（東京都荒川区立尾久八幡中学校）の就任が承認されました。川越新会長の就任あいさつでは新学習指導要領の円滑な実施への校長会の取組や働き方改革への対応、そして全日中教育ビジョンの一層の推進に向けた抱負が力強く述べられました。

その後、令和元年度の活動方針・予算、第71回和歌山大会について提案・承認が行われ、最後に宣言・決議を採択し議事を終えました。その後、第70回群馬大会について連絡があり、総会1日目は終了しました。

2日目は、「当面する初等中等教育上の諸課題」と題して、文部科学省初等中等教育局各担当課長からの行政説明がありました。担当課長の説明の冒頭に、「校長先生方、退職してる場合じゃありませんよ。」という言葉が投げかけられ、会場が笑いに包まれたのですが、それは、総会前週に安倍首

相が言及した「雇用期間70歳までの引き上げの努力義務」を受けてのお話でした。働き方改革とともに雇用期間の引き上げについても、変化の激しい時代の先を見通す力や、現場の意識改革の必要性を改めて痛感しながら、599頁に及ぶ膨大な資料をもとに行政説明を拝聴しました。

1 新学習指導要領の実施に向けて

- 特別の教科道徳の評価について
 - ・ 年間を通じた児童生徒の成長・変容を認め、励ます記述による評価の工夫を行う。
- 外国語教育の抜本的強化について
 - ・ 小3・4年で「聞くこと」「話すこと（やり取り・発表）」を中心に学習への動機付けを高め、5・6年で段階的に「読むこと」「書くこと」を加え、指導の系統性を確保する。
 - ・ 中学校では、授業を外国語で行うことを基本とし、互いの考え・気持ちを伝え合う活動を重視、実際に活用する言語活動を充実させる。

2 新しい時代の初等中等教育の在り方について

- 働き方改革について
 - ・ 「時間」は、児童生徒にとっても教師にとっても、最も大切な資源である。
 - ・ 働き方改革により、授業がよくなり、生徒が伸びることを目指す。
 - ・ 「日本型学校教育」はこれまでも高い成果をあげてきたことを踏まえ、社会の急激な変化と課題を踏まえた教育・学校・教師の在り方の総合的な検討が必要になる。

上記を含む行政説明は、今後の我が国の教育行政の方向性を理解する有意義な機会となりました。

また、児童生徒課長からの説明では、いじめや虐待、学校の危機管理の基本的な対応等について、具体的、かつわかりやすい内容のお話があり、多くの収穫のあった行政説明の時間でした。



支会情報と特色ある経営

伊達

伊達支会の活動



伊達支会長 大木 修
(桑折町立醸芳中学校)

伊達支会は、伊達市、桑折町、国見町の3市町の計8校の中学校長で組織し、活動しています。今年度は、新しい会員として、転入2名、新任1名の3名を迎えてスタートしました。

また、地区の小学校長20名とともに「伊達地区小・中学校長協議会」を組織し、小・中学校長が連携して地区の課題解決に当たっています。

1 伊達地区小・中学校長協議会の活動

基本テーマ「教育改革期における学校組織マネジメントの確立と推進」の下、職務遂行能力の向上のために研修に取り組んでいます。

(1) 定例研修会(年6回)

各組織の運営推進と状況の確認や県校長会の研究テーマを基にした協議のほか、時機に応じた講義などを実施しています。

(2) 研修視察(年1回)

夏季休業中に先進校や研究・教育関係施設の視察を行っています。

(3) 教職員研修講座(年7回)

教職員の資質向上のため、教育委員会の協力も得て実施しています。

2 中学校長会の活動

(1) 定例会(年6回)

小・中の協議会にあわせて、学校運営上の課題や中教研、中体連、県校長会の各部会の活動について、情報交換や協議を行い、伊達地区中学校の校長として足並みをそろえ一体感をもって経営できるようにしています。

(2) その他の取組(各年1回)

- ① 支会内の各教育長との懇談会
- ② 支会内の高等学校長との情報交換会
- ③ 教員採用試験受験者への激励会

「伊達は一つ」を合言葉に、本音を出し合い高め合うことにより、教育活動の向上、そして生徒たちの成長に繋がりたいと思っています。

《学校紹介》

「プロジェクト学習」の実施

国見町立県北中学校

国見町では、以下の課題を踏まえ、「国見町プロジェクト学習」を実施してきました。

1 国見町の課題

- (1) 高校や大学が存在せず、中学校卒業後は地域での交流の機会がなく、若者同士や若者と地域住民との繋がりが希薄となっている。
- (2) 「若者の学び・活動・交流の場」が他地域へ移ることにより、地域への愛着が薄れ、若者の「まちづくり」への参画や意見が反映されにくい状況となっている。

2 「国見町プロジェクト学習」の実施

- (1) 課題を解決するために、国見町ならではの地域資源を活用した異なる様々な切り口で、対話や地域での体験・交流を通じて自らの目的意識や将来像を明確にする。
- (2) 中学生及び高校生を対象に実施し、学ぶ喜びを引き出す。

本校では、国見町企画情報課より「国見町プロジェクト学習」を中学校で実施しないかとの提案を受けました。「自己肯定感や表現力がやや乏しい」といった本校生徒の課題解決につながることを考え、各学級2単位時間で実施することにしました。当日は、岡山県から新免琢弥(しんめんたくや)先生を講師に迎え、生徒は「学ぶ意義」や「働く意義」などについて対話しながら楽しく学び、答えが一つではない問いについて、自分の納得解を導こうとする姿が見られました。希望者は、「国見町プロジェクト学習」で継続して学ぶことができるしくみになっています。



(校長 梅宮 賢)

郡山

郡山支会の活動



郡山支会長 堀田 隆
(郡山市立郡山第一中学校)

郡山支会は、29校（市立中学校26校、私立中学校1校、義務教育学校2校）で組織し、緊密な連携のもとに会を運営しています。今年度は、2名が行政から転入し、校種間異動1名と再任用1名を含めた4名の校長先生方を迎え、新たな体制でスタートしました。また、これまで小中一貫校として位置付けられていた湖南小・中学校が、本市2校目となる義務教育学校として新たな歴史を刻み始めました。

今年度の活動の中で特に重視したい内容については以下のとおりです。

今年度の活動の中で特に重視したい内容については以下のとおりです。

- 1 定例会（年6回）の情報・意見交換の充実
SNSによる学校関係情報が氾濫する中、支会の中学校の実情や課題、その他の情報について正しく理解し共有することにより、学校間で連携して諸課題に対応できる環境整備をすすめます
- 2 組織に特別委員会を設置し、その活性化を図りながら支会の実態に応じた実効ある活動を推進します（〔 〕は連携先）
 - ① 学力向上対策委員会（数学）〔中教研〕
・自作問題やアンケートを基に実態を分析し授業の改善策等を提案します
 - ② 人材育成委員会〔郡山市小学校長会〕
・管理職を目指す教員研修会を運営します
 - ③ 【新設】学校運営研究委員会
・再任用校長と支会長が学校の様々な課題解決に向けた相談等に当たります
- 3 連携活動の充実
 - ① 市教育委員会との連携では、学力向上、働き方改革、不祥事防止等の諸課題に係る会議や研修会等へ協力するとともに、児童生徒の事故防止のための情報交換を行います
 - ② 年2回、中高特連絡協議会を開催し、進路指導や生徒指導等について、意見交換を行い、今年度は、特に、高校の入試改革について研修を深めます
 - ③ 市内の教育関係団体との連携を推進し、広い視野から学校経営の改善に努めます

以上の重点内容を念頭に置き、5専門部、5団体の活動を中心に、今年度も本支会の組織力を生かした取組を積極的に行ってまいります。

《学校紹介》

『富中PRIDE』に満ちた学び舎をめざして

郡山市立富田中学校

本校は、郡山市内を一望できる高台に位置しており、進む周辺の都市開発により市内有数の規模へと成長を続けています。昇降口には『富中PRIDE』～自信と誇り～というスローガンが掲げられていますが、『富中PRIDE』とは特別な実績や成果から生み出されるものだけではなく、当たり前前を当たり前前にできるなど、人として、集団として、周囲から讃えられるような心の成長から醸し出される気持ちの有り様を意味しています。本校では、様々な教育活動を通して、この『富中PRIDE』に満ちた学校づくりに取り組んでいるところです。具体的な例として、まず、郡山支援学校との交流活動が挙げられます。本校生徒が支援学校を訪問して演奏活動やゲームなどの交流活動を行う年2回の「交流会」と、支援学校の生徒が本校で授業を体験する年2回の「授業交流会」があります。生徒たちの「笑顔」の交流を間近に目にする、生徒同士の心の距離の縮まりが感じられ、思いやりと優しさに満ちた人間としての尊厳が『富中PRIDE』として生徒たちの心に刻まれるようです。次に挙げる活動は、地域ふれあい活動『富田駅清掃』です。郡山富田駅は、2年前に本校の東側に開業した新駅です。本校では、これまで生徒会活動の一環として、施設への花プランターの贈呈や公民館の清掃などの地域貢献活動を行ってきましたが、新駅の開業を機に、駅清掃という新たな活動を開始しました。

これらはいずれも地道な活動ではありますが、生徒たちにとっては、人とのふれあいや身近な事象から新たな発見が得られる貴重な体験であり、『富中PRIDE』という心の輝きを増す確かな学びにつながるものと考えています。



(校長 熊坂 洋)

東西
しらかわ

東西しらかわ支会の活動

東西しらかわ支会長 鈴木 健生
(矢吹町立矢吹中学校)



東西しらかわ支会は、6年前の平成25年度に東白川郡の4校と西白河郡の14校が統合し、県内でも大きな支会となりました。加えて平成30年度には陸上競技大会や駅伝競走大会が石川支会との合同開催となり、大会等では一段と大きな団体となって盛り上がりを見せています。活動面では東西しらかわ支会のみの変革ではなくてきているところです。

現在、東西しらかわ支会には、18校の中学校がありますが、今年度から川谷中学校が小中一貫校となり、その校長先生が小学校籍のため1校分減ったような感じがしています。また、昨年度末には、5名の校長先生が退職を迎えたため、今年度は約3割が新たな顔ぶれとなりました。代替わりで致し方ないとは言え、今まで支会校長会を牽引してこられた先生方の分を、何とか新たに昇任・転入してきた先生方と力を合わせて運営しなくてはなりません。年度初めの総会時に全員で、「令和元年度の校長会は、若返りを見せた分、経験不足は否めないのので、皆で協力してやっていきましょう。」と共通理解をしたところです。

さて、今年度、本支会としては、年間を通して検証すべきこととして、①新しい高校入試制度の課題や問題点、②夏季休業等の縮減に付随する問題点、③道徳の教科化・評価に関する課題、④働き方改革（指導要録・調査書等のデータリンクできる電子様式の進捗状況）、⑤人事上の諸問題等を取り上げ協議・研究を進める予定です。また、昨年度に引き続き「校長ならではの悩み、各校の運営上の悩み・問題点」について、情報交換を重視し、互いにアドバイスをしながら年5回の校長会を充実させ運営していきます。毎回の校長会を笑顔溢れる憩いの場とし、研修に努め、活性化を図りながら、校長一人一人の力量の向上に努めたいと思っています。

《学校紹介》

ふるさとを県内外に発信!!

西郷村立川谷中学校

本校のある西郷村は、県（東北）最南端に位置しています。戦後の開拓後に設立された歴史を持つ、全校生18名が在籍する中学校です。

今年度より併設している川谷小学校（児童数35名）と共に多くのカリキュラムを連動し、県南初の小・中一貫校としてのスタートをきりました。

本校は、西郷村内どこからでも入学を可能とする特認校制度を実施し、小規模校の良さを生かしたきめ細かな指導を行っております。

学校経営では、「小中9年間を見通したキャリア教育を踏まえ、川谷の特性を生かした、児童・生徒一人一人に応じた教育の推進」を基本方針に小中一貫化を進めております。

学力面では、小・中教諭の相互乗り入れ授業を年間を通じて行い、中一ギャップの解消を図っております。

心力面では、「Frontier, Friendship, Family and FURUSATO」について考える「F TIME」を総合的な学習の時間に位置づけ、豊かな体験活動・交流活動を進めています。交流活動では、村内在住の人材を活用しての生徒が望む職業人講話や職業人インタビューを実施しています。体験活動では農園作業として地域の特産物である馬鈴薯を栽培し、「日本橋ふくしま館」でオリジナル料理レシピを配付したり、生徒が制作した地元甲子温泉のPR動画を放送したり、地域発信を行いました。

地域の先人たちが築いてきた「開拓の精神」や地域の魅力を様々な形で県内外に発信することは、地域の活力源となり、延いては福島復興へのきっかけになるものと考えております。



「日本橋ふくしま館」で地域をPRする生徒

(校長 吉田 衛)

北会津

北会津支会の活動



北会津支会長 歌川 哲由
(会津若松市立第三中学校)

北会津支会は、会津若松市、磐梯町、猪苗代町、3市町の15校で構成されています。会津全域では、各支会の小中学校長協議会や、全会津中高校長連絡協議会などの組織を通して、小中や中高の連携を重視した活動も行っています。全会津中高校長連絡協議会では、3年前から大学入試制度改革に対応するために、中高連携してどのような取組ができるか、受験産業界から講師を招き、講演と質疑応答を通して知見を深めてきましたが、今年度も、国の教育改革について、実践事例を基に講演いただき、希望する小学校長も受け入れながら勉強する予定です。小中高の連携を強めながら、大学入試制度改革に対応できる生徒を育てて行きたいという思いを共有しています。

本支会では、第6小主題について、令和3年度の東北大会、全国大会で発表を担当することになっており、実践研究にも力を入れています。3市町持ち回りで実施している恒例の夏季研修会を、今年度は猪苗代町で開催しますが、それぞれの実践事例を持ち寄り、じっくりと協議を深める予定です。さらには、ご当地猪苗代町教育長のご講話をいただき、教養を高めたいと考えています。

また、学校における働き方改革も推進しなければならないと考えています。県教委のアクションプランや市町の施策に基づきながらも、校長会がアイデアを出し、共通実践しながら検証していくことなしに、文科省が示した勤務時間の上限に関するガイドラインなど、到底達成できるはずがありません。部活動以外の領域でも、何かしらの共通実践を進めたいと考えております。

最後になりますが、中学校長会の最大の意義は、横の繋がりを強固なものとし、学び合いながらより良い学校経営を目指すことと、それぞれの豊かな経験を出し合って課題解決を目指すことと思いつつ、一層連携した活動を進めてまいります。

《学校紹介》

学園構想の実現をめざして

会津若松市立河東学園中学校

河東学園中学校は、木のぬくもりを感じる新築2年目の新しい学校です。市町合併以前からあった河東学園構想は、震災等の影響により、小学校の統合移転から10年以上の時間が経過してしまいましたが、昨年度中学校が小学校に隣接して完成し、いよいよ第一歩を踏み出しました。

まず行ったのは時程のすり合わせですが、授業時間の違いを、校種の特質をうまく生かしてほぼ合わせることができました。教育目標も話し合いを重ね、9年間の義務教育を通して育成したい児童生徒像を明確にして設定しました。さらに共用するセンター棟の使い方や小学校棟・中学校棟の管理などについても共通理解を図りました。

会津若松市は中学校区での連携を以前から行っていますが、その中でも河東学園は実効ある取組がしやすい環境にあります。2年目に当たる今年度は、昨年度以上に小中連携を進め、児童生徒のよりよい成長・育成を目指していくため、小学校長との積極的な意思の疎通（校舎内移動や内線通話が可能）や、小中連携部会での教職員の積極的な交流・真摯な意見交換などを通して一体化を進めていきたいと考えています。PTAも奉仕作業や教育講演会の合同開催などに取り組んでいます。



今後は、小中で一つの学校運営協議会設立を考えています。河東学園を、地域と共にある学校に、さらに地域と共に子どもたちを育成する学校にしていけるよう、全力で取り組んでいきたいと思つています。
(校長 遠藤 修一)

新会員紹介

支会	氏名	校名	支会	氏名	校名	支会	氏名	校名
福島	芳賀沼 彰	北 信	田 村	真 船 毅	船引南	両 沼	川 口 和 彦	金 山
福島	熊 谷 幸 司	川 俣	田 村	高 橋 幸 市	岩 江	両 沼	星 文 行	昭 和
福島	岩 野 政 二	山木屋	麴 <small>しらかわ</small>	渡 邊 泰 昌	中 島	南会津	芳 賀 稔	館 岩
伊 達	佐 藤 智 晃	梁 川	麴 <small>しらかわ</small>	桑 原 透	泉 崎	相 馬	鈴 木 太	原町三
伊 達	佐々木 透	月 館	麴 <small>しらかわ</small>	金 子 景 二	塙	相 馬	佐 藤 公 一	飯 館
安 達	高 橋 一 彦	小 浜	北会津	長 澤 潤	大 戸	双 葉	西 丸 賢	双 葉
安 達	矢 内 信 男	岩 代	北会津	青 柳 茂 宏	磐 梯	双 葉	新井田 克 生	大 熊
安 達	原 田 博 司	東 和	北会津	富 樫 康 夫	吾 妻	双 葉	設 樂 芳 浩	鯛 <small>(富)</small>
岩 瀬	佐久間 利 則	小塩江	耶 麻	佐 藤 義 和	山 都	双 葉	佐々木 徹	川 内
岩 瀬	岡 部 昭 彦	仁井田	耶 麻	齋 藤 匡 史	裏磐梯	いわき	大 竹 学	桶 売
岩 瀬	馬 場 廣 明	岩 瀬	両 沼	板 橋 和 典	湯 川	いわき	後 田 浩	内郷三
岩 瀬	馬 場 哲 明	天 栄	両 沼	高 橋 由 江	新 鶴	いわき	西 郡 美智広	上遠野
石 川	吉 田 和 夫	須 釜	両 沼	関 根 宏 房	三 島			

新会員の声

有終完美

玉川村立須釜中学校 吉田 和夫

「有終完美」とは、今年度の本校生徒会のスローガンです。本校は今年度をもって73年の歴史に幕を閉じ、来年4月1日には村内の泉中学校と統合し、玉川中学校として生まれ変わります。そこで生徒会役員が昨年度末に「何事も終わりが肝心」「最後まで立派にやり遂げる」という意味を込めてこのスローガンを決定しました。この4文字が大きな模造紙に手書きで力強く書かれ、生徒昇降口に掲げられています。生徒たちは毎日この4文字を見ながら、今年度が最後だという自覚をもって授業はもちろん中体連など様々な行事に日々取り組んでいます。

校長室の机の正面と横の壁には昭和22年度から歴代26名の校長先生の顔写真が掲げられています。「しっかりやれよ」と常に叱咤激励されているようで、背筋を伸ばして勤務しています。

保護者や地域の方々も学校教育への理解が深く、PTA活動や部活動の応援、地域をあげての環境整備など手厚い協力と支援を受けています。

このように歴史と伝統があり、地域の方々も愛着をもって須釜中学校の最後の校長として、生徒や保護者、地域の方々、教職員と力を合わせて毎日の教育活動や閉校、統合の準備を進め、「有終完美」を遂行していく覚悟です。

「生徒ファースト」で

会津美里町立新鶴中学校 高橋 由江

「磐梯飯豊ならびたつ 会津平野を前にして
鶴沼川のせせらぎに 心も清く 身も軽く…」

着任式の時、新任校長を期待の眼差しで一心に見つめながら、大きな声で校歌を歌う生徒たちと対面し、校長として、93名の生徒たちの心身ともに健やかな成長を担っているという責務の重大さを改めて痛感いたしました。

会津美里町には、質の高い授業を目指した「みさとの教え・みさとの学び」と基本的生活習慣の確立を目指した「みさと運動」が根づいています。

これらを基盤として、未来を担う子どもたちの育成のためには、幼小中高特支の「学びと育ちのつなぎ」の重要性を意識した連携・協力と学校が地域社会と共に子どもを育てる視点を大切にしたいと取組が必要であると考えます。学校、家庭、地域が一体となった「チームとしての学校」づくりを学校経営の柱として、教職員と共に生徒一人一人が将来の夢や希望進路の実現を果たすために必要な「生き抜く力」を育むことができるよう全力で取り組みたいと思います。

複雑・多様化する社会の中で、ますます教育的ニーズが高まり、時には大きな壁につきあたることあるかと思えます。しかしながら、同じ支会の校長先生方をはじめ、お世話になった先輩の校長先生方からご指導をいただきながら、「生徒ファースト」の気持ちを第一に、「自分に何ができるのか」「何をしなければならないのか」「そのためにはどんな手立て・工夫・体制が必要なのか」など日々自問自答し、自己研鑽に励み、教職員と一丸となって邁進していきたいと思えます。

梅雨の合間にまぶしい日の光が降り注ぎ小鳥のさえずりが心地よく耳に届く中、ボランティアで掃き掃除をしたり互いにあいさつをかわしたりする子どもたちなど、朝のすがすがしい光景に心がやわらぎます。中体連大会に向けて頑張ってきた子どもたちに成長の姿を感じるとともに、新たな目標を目指して更なる向上を期待しているところです。

本校でも、5月中旬に教育実習生を受け入れました。実習生が来るたびに、自分自身の30年以上も前の姿を思い浮かべ、友人宅に泊めてもらいながら6週間の実習をしたことや、自分の至らない授業などを思い返します。実習生と指導案について話し合う中で、「一人一人の子どもの実態を捉え、それぞれの子どもの考えや思いに心を寄せて、指導内容や活動を整理しましょう」などと、実習生の思いを踏まえつつ、昔指導されたことを伝えている自分に気づきます。当時教えていただいた「子どもをよく見る」という考え方が、今でも自分の支えになっていることを改めて思いました。

実習期間中に、新聞に掲載されていた秋田喜代美先生の「続・保育のこころもち」という記事が目にとまり、実習生と話をしました。「育ちの『決定的瞬間』」、「一瞬の姿から成長の物語が見える」という見出しが付いていました。保育園での子どもの成長の瞬間の姿を保護者と分かち合いたいこと、有名な写真家が考える「決定的瞬間」、そして、その決定的瞬間を保育に当てはめた秋田先生の意味づけが綴られていました。

その中に、「保育においても、今を生きる子どもたちの姿とそれを捉える保育者の内なる対話が瞬間を捉え、伝えるものである。そのことを大事にしたい。そして、その瞬間は一瞬だが、その子どもに関わってきた人には育ちの過程が思い出され、物語が見えてくる。保育記録には、展開を言い表すことで意味をもつ記録とともに、瞬間が訴える記録もある。一人一人の子どもの決定的瞬間を、かけがえのない姿として大事にしたい。」という文章がありました。

私は、「この文章の『保育』を『指導』に置き換えると、中学校にも当てはめることができるのではないか、私たち教師がその瞬間を見逃さずに捉えられる眼をもち、職員同士や保護者と共有していくことが大切ではないか」と実習生に投げかけました。実習生は、「評価規準による評価も大切だが、生徒の日や表情そして教師の問いかけに対する反応などを見ると、生徒が何を考えているのかを理解することに近づけるのではないか。それが、前に校長先生が話していた『生徒の息を感じる』ことではないか」と返してくれました。私は、自分が大切にしていた部分が伝わっていたように感じ、少し嬉しくなりました。

この記事で、私自身の立場から学校経営に当てはめると、職員同士が日頃から互いに自分たちの成長の決定的瞬間を捉え、子どもの成長との関係性から、取組の意義を全体で共有することなのかなと思います。そのことによって、教師一人一人が、自分自身や互いの成長の物語を紡ぎ、自分たちの更なる成長や教職人生の充実が図れるのだと思います。それは、言い換えれば、校長がそれぞれの教師の力を融合し学校力として最大化

するというので、それが豊かな学校づくりにつながるはずなのですが、「言うは易く行うは難し」です。

また、秋田先生が「今を生きる子どもたちの姿とそれを捉える保育者の内なる対話が瞬間を捉え、伝える」としているように、校長が、職員の姿と自身の内なる対話によって決定的瞬間を捉え、それを伝え共有することがポイントなのだと思いますが、私は、内なる対話がまだまだ貧しいため、決定的瞬間を逃してばかりだと思います。これから、残された時間はどんどん減っていきませんが、内なる対話を豊かにし、決定的瞬間を捉える努力を続けながら学校づくりに励んでいきたいと思っています。

教育実習生が、実習終了のあいさつの中で、「先生方はさすが教育のプロ」という言葉で感想を述べていました。私は、その瞬間、感謝の気持ちでいっぱいになりました。

随想



福島県中学校長会副会長
佐原 聡
(二本松市立二本松第一中学校)

「瞬間」を捉える